

平成19年度公認会計士試験 合格体験記



岡本 須美子
(会計研究科 第1期生)

私は会計大学院が創設されたことを機に会計士試験の勉強を始めた、会計研究科1期生です。現在、某監査法人に勤務しておりますが、入学以来たくさんの方々にお世話になりました。ここに感謝の気持ちを込めて体験を記させていただきます。

私は大学院の授業と受験予備校を両立して勉強していました。ただし大学院の授業については会計士試験に直結したものを優先して受講し、予備校については通信受講をすることによって、自習時間の確保を図っていました。

入学当時は分からないことが多すぎて、スピードの速い大学院の授業についていけず、予備校の暗記中心の勉強に偏りがちでした。しかし1度目の試験惨敗により、暗記中心・計算中心の勉強に限界を感じ、大学院の理解中心の授業に重きをおいた勉強方法に軌道修正しました。大学院の授業では「分かっているつもりでいるだけで分かってないこと」に気づかせてくれるヒントがたくさん隠れています。そこで、授業のなかで「なぜか」を常に考えることを心がけました。答えは正しい。でも「なぜか」と問われると、うまく答えられない。そんな問題をひとつひとつ潰していきました。特に財務諸表論については、米山正樹先生にお願いして、演習問題の添削を定期的にしてもらっていました。毎回新たな発見と感動があり、苦手だったはずの財務諸表論が試験直前には得意科目になっていました。

またワークアウトはアウトプットの練習として効果的でした。パターン化しがちな予備校の答練に慣れすぎると、異なるフォーマットの問題がでると怯えてしまいます。本試験でどんな問題が出されても怯まない訓練となったと同時に、プラスアルファの知識となりました。

振り返れば、私は大学院の授業も予備校との両立の仕方でも手探りでやってきましたが、試験に直結してないと思われる授業についても「会計」に対する理解を助けるものであり、会計士試験受験の観点からしても有意義なものであると思います。少なくとも、そのような知識の蓄積が平均的な受験生プラス1を生みだし、合格に導いてくれたのではないかと私自身は思っています。また、会計士試験受験以外の観点からすれば、研究科で得た知識が様々な方面で役立つことは言うまでもありません。

合格までの道のりは、厳しくつらいものだと思います。先の見えない不安といつも隣り合わせで、何度も何度もくじけそうになるかもしれません。しかし勉強でのストレスは勉強することで解消されず、ただただ諦めずにやり続けることこそが、合格への近道だと思います。

平成19年度公認会計士試験では、本研究科の在學生33名、修了生17名(在学中合格者は含まず)が合格しました。 [合格者 / 受験者(合格率) 2007.12.5現在]



	論文式 ()	短答式(受験者・人)
1年生	15 / 38 (39.5%)	82
2年生	18 / 35 (51.4%)	56
在學生合計	33 / 73 (45.2%)	138



長瀬 充明 (会計研究科 1年)

合格の決め手となったものは何か
はじめに、試験終了後の手応えとして、合格する自信があったわけではなかったことを前提としてこの体験記を書かせて頂きます。合格の決め手は、計算科目に特化した勉強によって、簿記・管理会計が得点源になったことではないかと考えます。

勉強方法について
何か自分で工夫した点があるか

勉強で工夫した点は、理論科目に勉強時間をかけなかったことです。一日に勉強する科目は2科目又は3科目でした。テキストは使用せず、問題を通した理解を心掛けました。

受験予備校の利用

予備校は通信を申し込み、答練とアクセスの問題を利用しました。予備校の講義は、昨年度は受けましたが、本年度は受けていません。

会計大学院の授業は役に立ったか

財務会計・管理会計の授業が役に立ちました。論文式試験は応用力を試す試験を謳っていることから、会計の国際的動向、先生方の視点、実務的意見を重要視しました。

これはおススメしたいという勉強方法など

絶対的な勉強方法はないと思いますので、多くの情報を入手し、自分に合う勉強方法を見つけてほしいと思います。本試験の点数に結びつく、継続してやりたくなる勉強が理想的だと思います。ここでは最終的に固まった直前期の勉強方法の概要を書かせて頂きます。

・計算科目については、予備校の問題集・予備校の答練・会計研のワークアウト(以下、WO)を論点別に繰り返し解いていました。なお、繰り返し解く問題も苦手な問題、頻出論点のみに絞りました。

・理論科目については、答練・WOを論点別に繰り返し読みました。書く練習はWOのみです。暗記は行っていません。なお、企業法についてはWO・CPAの問題集を利用し、チューターの先生に相談して解く問題を絞りました。

答案作成時の留意点

文章は短くとも、点数がきそうなキーワードや理由・趣旨等をできるだけ強調させ、採点者の見やすい答案の作成を心掛けました。解答困難な問題は、原理原則を踏まえつつ自分なりの解答を導き、空白を避けました。

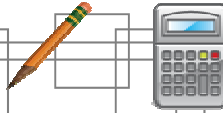
会計大学院に対する要望

会計士試験受験という観点から

これについては、これから試験を受ける方々に聞くほうがよいと思います。私自身、受験時は、勉強に関する情報・アドバイスを欲していました。

会計士試験受験以外の観点から

キャリアアップのための勉強会があればいいと思います。どの業種にどのようなスキルが求められるのか、試験合格者を対象とするものなど。また、4月からでもゼミに入り、修士論文を執筆できるようにしてほしいです。



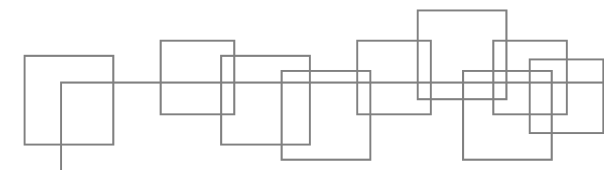
高橋 敦史 (会計研究科 1年)



私は公認会計士試験に合格するには、自らにあった勉強方法で計画をたてて勉強すること、メリハリをつけることの2点が重要であると考えます。

私は卒業論文の執筆があったために12月~2月はほとんど会計士の勉強をすることができませんでした。そのため予備校の講義はほとんどテープになり、答練などもほとんど受けることができませんでした。自分で試験の日から逆算し、長期・中期・短期の勉強の計画をたて、それにしたがって勉強することで合格することができたと思います。

またメリハリをつけることも非常に重要であると考えます。毎日10時間以上の勉強を一年を通してできる人はほとんどいないと思います。自分にあった息抜きの仕方で、精神的にリラックスすることが大事です。私は、やる気がでない日は一日



平井 健之 (会計研究科 2年)



字数が限られているので、実際に利用した講義と参考書を紹介し、勉強の大きな流れみたいな観点から書きたいと思います。実際に受講した講義及び参考書は以下の通りです。

【大学院】

1年生春：簿記、財務会計、原価計算、管理会計、租税法、法人税法、企業法、職業倫理、ビジネスエコノミクス。

1年生秋：財務会計(川村先生)、財務会計WS、管理会計(清水先生)、法人税法、租税法ワークショップ(山口先生)、企業法、企業法ワークショップ、監査。

2年生春：財務会計各論、企業評価、所得税法、消費税法、租税法テーマ研究、監査ワークショップ、ERPシステム実務。

この他に、出席できる範囲で、租税ワークショップ(松岡先生)、品川先生のロースクールの講義を聴講させていただきました。

【参考書等】講義の教科書以外の主なものです。「管理会計」同文館出版、企業法の論点集(会計研作成のもの)、「伊藤真の条文シリーズ会社法」弘文堂、「スタンダード監査論」中央経済社、「改定監査基準を考える」同文館、「演習ノート租税法」法学書院、有斐閣アルマシリーズ「経営戦略」「組織管理」「マーケティング」

私の場合、勉強は大学院を中心にし、補足的に専門学校を利用したかたちでした。大学院の講義は、すべて積極的に参加しました。復習に力を入れ、講義復習ワークアウト復習を繰り返しました。1年生のときのワークアウトは、ほぼすべて受講しました。そのおかげで、講義の理解がさらに深まった感じがします。長期休暇時及び直前期は、専門学校の教材、参考書を中心に勉強をしましたが、基礎的な知識、思考は大学院がベースとなっていました。計算対策として、1年生の9月から受講し始めた専門学校の計算答練は、論文式試験の直前まで、必ず朝受講し、当日の解き直し、後日最低でも1回の解き直しを徹底しました。最低1日1問の計算問題(総合問題)を解くことが、自然とできるようになっていました。また、直前期は別ですが、週に1日はあまり勉強しない日も設け、リフレッシュは積極的に行いました。気分が乗らないときは、参考書を喫茶店で読んだりし、机に向かわない時間でも、試験に関係する何かをしていました。今回、会計士試験に合格できたわけですが、大学院を勉強の中心に据え、補足的に限定して専門学校を利用したことで、どっちつかずの状態中途半端にならなかったことが、結果的に良かったと思っています。会計研究科に在籍し公認会計士試験を受験する方に、少しでも参考となれば幸いです。

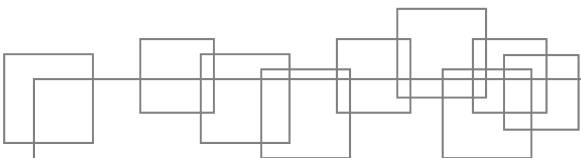
最後になりますが、19号館の自習室には大変お世話になりました。勉強に専念できる環境も提供してくれた会計研究科に感謝致します。さらには、公認会計士試験に専念できるように配慮しながら、論文指導をして頂いた品川先生にも感謝致します。



まったく勉強しない日もありましたし、三月に卒業旅行に行くことなどもしていました。これは極端な例かもしれませんが、勉強しているからといって我慢をしすぎず、時にはやりたいことをやることも重要であると思います。

次に大学院の勉強と予備校の勉強の両立ですが、両者の長所をうまくとれば非常に有効だと思います。予備校の勉強は会計士の勉強のために体系だてられていて、最小の労力で合格できるようにできていると思います。私は、ベースは予備校に置きより細かい知識を大学院で補っていました。大学院の授業は、予備校の授業とかぶるところもちろん多いのですが、より学問的な深い話を聞けるとと思います。このような話を聞けることは試験にも、その後社会に出ても有用であると思います。私は午前大学の授業にでて、午後は自習をするというスタンスで勉強していました。

会計研究科は創立してからまだ浅く、自習室の環境や、授業でもまだまだ改善する余地はたくさんあると思います。しかし、その分改善されるスピードは速いと感じているので、これからよりよい研究科になっていくと思います。



飯塚 祐太 (会計研究科 1年)



私が2006年の12月にこの早稲田大学大学院の会計研究科（以下、会計研）を受験してから1年がたっています。その頃は、何をどう勉強したらいいのか、将来はどうなるのか、会計士試験に受かるだけの資質が自分にはあるのか、悩んでいた日々でした。東京で一人暮らしをしている私が実家に帰り、地元の海岸をふらふらとさまよった時はもう駄目かとも思いましたが、1年後にこうしてこの文章を書いているのは不思議なものです。参考にはならないかもしれませんが、この1年で何をどう考えて勉強してきたかを記していきたいと思います。

この試験を受験する上で一番のポイントは勉強する範囲を明確にすることだと思います。今年から論文試験の範囲が縮小されますが、それを考慮してもなお多くの範囲が残っています。すべてを網羅して勉強するのはかなり厳しい。ならば、試験範囲を区切って勉強することが大切だと思いました。私の場合、すでに長い間専門学校で学習していたので、専門のテキストがありました。それを元に自分が常に見るもの（以下、ベース）を作りました。ここで大事だったのは、一つ区切りをつくったことだと思います。先程話したとおり、範囲が膨大なのでどうしてもやみくもに手を伸ばすと自分が何をやっているのかわからなくなります。手を広げていくにしても関連付けて覚えていくことが大事だと思います。自分が戻って確認できるものがあると道に迷わなくなります（迷わない気がします）。

私はベースの材料として専門学校のテキストを使いましたが、当然会計研のレジュメ・テキストなどを使っても当然良いでしょう。専門学校のテキストを使うのならば、会計研の授業の内容で専門学校のテキストに載っていないものは書き足しておくことをおすすめします。情報を一元化することで何箇所も見の手間を省くことができます。例えば、原価計算の場合、ベースの材料は専門学校のレジュメを使っていますが、その中には清水先生のコメントが載せられています。仕損・副産物のところには「マロングラッセ（先生好物）。材料だけでなく労務費・製造間接費込み」。こんな感じです。

自分のベースを作ったら、それを繰り返し何度も読むことでそこに書かれていることは、必ずできるようにしました。2週間に1度は必ず全範囲のベースに目を通すことを目標にしました。もちろん、目標どおりにはできませんでしたが、見る回数は増えたはずですが、私の感覚なのですが、深くじっくり読むよりも浅く回数を多く読むほうが最終的には覚えがよい気がします。すべてを網羅することは難しいので、自分が決めたベースをやる。加えて、私は答練で間違えた箇所を書き込んでいきました。どの論点で間違えたのかを記載しておく、ベースを見たときに復習がしやすくなります。これも情報の一元化と言えます。答練も記録した間違えたところだけを重点的に復習することで時間を省略できるはずですが。

先程もレジュメのところでも出てきましたが、会計研と専門学校の両立は非常に難しい問題です。多くの受験生を抱える専門学校は実質的に母集団を形成しているので無視はできない存在です。特に人生がかかっている勝負の試験なのでリスクはなるべく避けたい。結果的に私がどうしたかという、併用という手段をとりました。専門学校のテキストを主としたベースに会計研の授業内容を書き込み、会計研の授業における小テスト・期末テストをしっかり復習して受けることを心がけました。私なりのわりきりですが、受かることが目的であってどちらかを取るかの選択ではないと考えています。当然といえば当然ですが、会計研の授業は専門学校の授業よりも質の高いです。ワークアウトにしても同じことが言えます。これをどう生かすかを考えていました。

最後になりますが、1年前のボロボロだった状態からこうして合格体験記を書いているのは幸せなことです。この会計研が大きな転機になったのは間違いなく事実でしょう。授業などをご指導をいただいた先生方・事務の方々、同期のみんな、そして19号館で一緒に勉強した仲間にも深い感謝してこの体験記を終わりにしたいと思います。